

居心地のよい学級集団づくりの指導の在り方

－解決志向アプローチを生かした学級目標達成のプロセスを通して－

福島市立鳥川小学校 教諭 齊藤 雄策

1 研究の趣旨

小学校における学校管理下における暴力行為発生件数、いじめの認知件数、不登校児童数は近年増加傾向にあり、本県においても同様の傾向にある。河村茂雄(2007)は「子どもたちの不適応は、(中略)環境要因である学級集団との関係性が大きい」と述べており、教育の諸問題と学級集団との相関性を指摘している。また、小学校学習指導要領解説総則編「児童の発達の支援」には、「学級の風土を支持的な風土につくり変えていくことが大切である」とあり、学級経営の充実が求められている。

本研究では、「居心地のよい学級集団」を、「児童の願いが込められた学級目標が達成された学級」ととらえ、児童が学級目標を達成していく過程に焦点を当て学級集団づくりを進めたいと考えた。その中で、解決志向アプローチ^{※1}を生かし、学級目標達成を後押しするため、以下の仮説を設定した。

※1 「問題」ではなく「うまくいっていることは何か」を見つけ、望む解決の状態に向けて具体的な目標を設定し、うまくいっていることや役に立っていることを積み重ねていくことで、解決の状態をつくっていくアプローチとする。

児童が自分たちの目標とする学級を目指していく過程において、以下の視点で解決志向アプローチを生かした手立てを講じれば、児童一人一人にとって居心地のよい学級集団がえられるであろう。

【視点1】 目指す学級の姿を共有するための工夫

【視点2】 目指す行動を増やすための工夫

2 研究の概要

視点1 目指す学級の姿を共有するための工夫

【手立て1】 学級の「これから」を共有する行動目標の設定

学級目標を達成している姿について、「授業中」「休み時間」などの具体的な場面における行動目標を設定し、目指す学級の姿を共有する場を設ける。

【手立て2】 学級の「今」を共有するスケーリング

10段階で評価するスケーリング(数値化)を行い、設定した行動目標や学級目標の達成度について振り返ることで、学級の現状を学級全体で共有する場を設ける。

視点2 目指す行動を増やすための工夫

【手立て1】 目指す行動の仕方を学ぶ「できるとよい」プログラム実践

視点1のスケーリングの結果を基に、児童ができるとよいと考える行動に関連したSST^{※2}のプログラムを実践し、目指す行動の仕方を理解させる。 ※2 SST…ソーシャルスキルトレーニング

【手立て2】 目指す行動の定着を図る「できていること」フィードバック

「できるとよい」プログラム実践後、プログラムで学んだ内容について「できていること」を、教師が評価したり、児童相互に振り返らせたりすることで、児童にフィードバックする。

【手立て3】 達成感の低い児童を支援する「できるぞ」ミーティング

達成感の低い児童と休み時間などに意図的に話をする機会をもち、できていることを認め、スモールステップの目標を設定させる。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 行動目標の設定やスケーリングは、意欲的な児童の姿につながった。
- プログラムの実践は、児童が必要感をもち、行動の仕方を理解できた。
- 個別のミーティングは、児童が達成感を得られ、個の支援に有効だった。

(2) 今後の課題

- 「定着」について、基準を作成し、児童が客観的に評価できる工夫があるとよい。